

ゴータマ・ブッダの生涯と思想

羽矢辰夫

一 ゴータマ・ブッダの生涯

(一) 誕生

いまから約二千五百年前、シャーキヤ（釈迦）と呼ばれる部族が現在のネパールの南、インド国境近くに小国を形成し、カピラヴァットウを中心として農耕を基盤に共和政治を行なっていました。仏教の開祖とされるゴータマ・ブッダはこのシャーキヤ族のスッドーダナ王とマーヤー夫人のあいだに生をうけました。お釈迦さまという呼び名は、このシャーキヤ族の名称に由来します。

シャーキヤ族は経済的には比較的豊かであったようですが、政治的には隣国のかーサラ国に隸属していました。父スッドーダナは首長の地位にあり、家系的には由緒正しい「日種」（太陽系）の末裔でクシャトリヤ階級とされています。「日種」に属するというのは、印度一般に、生まれのよさを強調するときによく用いられる常用句ですが、シャーキヤ族がアーリヤ系の人種に属したのかどうかについては、肯定も否定もできないというのが現状です。

ゴータマ・ブッダが生まれた年（および亡くなった年）については数々の説がありますが、おおよそ二つの伝統にもとづく説で、ゴータマ・ブッダの死からアショーカ王の即位までを二百十余年と計算したもの。

一 前五六〇—四八〇頃説 これはおもに南方仏教の伝統にもとづく説で、ゴータマ・ブッダの死からアショーカ王の即位までを百十余年と計算したもの。

二 前四六〇—三八〇頃説 これはおもに北方仏教の伝統にもとづく説で、ゴータマ・ブッダの死からアショーカ王の即位までを百十余年と計算したもの。

一、二の両説には約百年の差がみられます、印度古代史における年代決定の困難さからみると、この百年という数字はきわめてわずかな差といえます。このほか、東南アジアの諸国で実際に行なわれている前六二四—五四四説（一九五六年五月から一年にわたって仏滅二千五百年の祭典が営まれました）、『歴代三宝記』の「衆聖点記」の伝説による前五六五一四八五説などの有力な説もありますが、今日の学会の標準的な説としては、中村元博士のとなえる前四六三—三八三説が採用されています。

ゴータマ・ブッダには幼少から物思いにふける傾向があつたようで、農耕祭のときの逸話が有名です。設けられた席にすわって人々が田を耕すのを見ていたとき、すきおこされた土のなかから小さな虫が掘りだされました。すると、それを見つけた小鳥がさつとその虫をついぱんだのです。さらにその小鳥はもつと大きな猛鳥におそれました。このような光景をまのあたりにして、ゴータマ・ブッダは生き物の世界の悲惨を

感じ、独り瞑想にふけるのでした。

さらに、ゴータマ・ブッダはぜいたくな暮らしをしているうちに、つぎのように思い悩んだとされます。つまり、ふつうの人々は、みずから老い病み死ぬ身でありながら、他人が老い病み死ぬのを見て、悩み、恥じ、嫌悪している、それはわたしにはふさわしくない、と。このように観察したときに、青年の意氣はまったく消え失せてしまいました。このことに関連して、いわゆる「四門出遊」の物語が語られるようになつたと考えられます。すなわち、あるときゴータマ・ブッダが東の城門から出ていくと老人に出会い、南の城門から出ていくと病人に出会い、西の城門から出ていくと死人に出会います。それによつてますます悩みを深くするようすでしたが、最後に北の城門から出ていくと出家修行者に出会い、その崇高な姿に感動して、ついに出家の決意をするといつものです。いささかドラマティックな筋立てになつていますが、こころの悩み、人間の避けられない苦惱の解決のために出家したのだ

という出家の目的が明確に示されています。

(一) 出家

「ゴータマ・ブッダはのちに、「わたしは二十九歳で善を求めて出家した」「わたしは若々しく、黒髪を保ち、青春にあふれていたが、髪とひげを剃り、袈裟色（黄褐色）の衣をつけ、家のない状態へと出家した。父母が涙を浮かべて悲しんだにもかかわらず」と回想しています。この二十九歳出家説はほぼ定説になっています。

おもな出家の動機としては、内的にはさきほどの「四門出遊」で述べた宗教的な発心と、外的にはコーサラ国に隸属している自國のおかれた政治的な状況を考えられます。

つぎに、当時のインドにおいて出家がそれほどめずらしくなかったことも注目されます。インドでは、人生を四つの時期に分けることが一般的でした。第一は学生期。師の家に住みこんで、ヴェーダその他のあらゆる学芸を学び、独身をきびしく守つて生活します。第二は家住期。家に帰つて結婚し、家長としての義務をまつとうします。それには、子孫を絶やさないこと、祭祀を行なうことなどがあります。第三は林住期。息

子に家督を継がせ、家を出て森林に住みます。その場合、妻をともなつてもよいとされます。森林では、瞑想・断食・苦行など、宗教的な実践に専念します。第四は遊行期。あらゆる執着を捨て、所有物なくして遍歴の旅に出ます。かれらは食を乞うことによつて生活します。以上の四つの時期は、おもにバラモン階級に関わるものなのですが、クシャトリヤ階級においてもこれに準じて考えられていました。ゴータマ・ブッダの場合、その立場を考えると家住期を終える年齢が少し若すぎたきらいはありますが、いざれにしても出家はそれほど特別な行為ではなかつたのです。

さらにつけ加えれば、当時の宗教・哲学界に一大変革がおこつていたことも重要です。これまで保守的な農村を基盤とし、ヴェーダの知識を背景に最高の権威として宗教・哲学界に君臨していたバラモンたちの支配力が、都市の経済力を背景とした新興の勢力によってその政治力が弱められるとともに、おびやかされてくるようになつたのです。ヴェーダの権威を認めない自由思想家たちが輩出して、バラモン教にかわる新しされていています。

もりはないかと説いますが、丁重に断わられてしまします。ゴータマ・ブッダは世俗の名利を求めるために出家したわけではないですから、当然といえば当然のことです。王はすぐにあきらめて、「さとりを得たときには、わたしを救つてください」といつて別れます。のちにビンビサーラ王は仏教の後援者となつて竹林精舎を寄進していまますし、かれに対する説法は数多く残されています。

いよいよ本格的な宗教生活にはいつたゴータマ・ブッダは、当時の宗教者が行なつてゐた瞑想や苦行の実践にとりかかります。まずアーラーラ・カーラーマというバラモンを訪ね、かれの体現した無所有處（自分に属するものはなにもないという境地）を学び、まもなくしてみずからもまた体現しました。アーラーラはゴータマ・ブッダの能力におどろき、後繼者にしようとしますが、ゴータマ・ブッダはこの方法では出家の目的は達せられないと感じ、かれのもとを去ります。ついで訪ねたのはウッダカ・ラーマブッタというバラモンです。ここでは非想非非想處（想いがあるのでもないのでも

い指導原理を模索していいた時代なのです。そのうちとくに有名だったのは、いわゆる「六師外道」でした。善惡の行為の報いを認めず道德を否定したブーラナ・カッサバ。一切はすべて決定されているという宿命論をとなえたアージーヴィカ教のマッカリ・ゴーサーラ。唯物論をとなえたアジタ・ケーサカンバリン。唯物論的な七要素説をとなえたパクダ・カッチャーヤナ。懷疑論あるいは不可知論者のサンジャヤ・ベーラツティ・ブッタ。仏教とならぶ大宗教となつたジャイナ教の開祖ニガンタ・ナーラブッタ。当時の北インドの政治文化の中心として栄えていたマガダ国の都ラージャガハには、このような自由思想家たちが多く集まつて自由に議論をたたかわせていました。ゴータマ・ブッダはかの地に行こうと思いました。

出家を決心したゴータマ・ブッダはひとり静かに城を出て、ラージャガハをめざします。ラージャガハを托鉢して歩くゴータマ・ブッダを見かけたマガダ王ビンビサーラはその尊い姿にうたれ、従者にその後を追わせました。そしてみずから訪ねていき、仕官するつ

ないという境地）を学びますが、やはり同様に満足できずに、かれのもとも去ります。かれらは瞑想による境地を最高度に極めていたのでしょうか、「ゴータマ・ブッダの問題意識の最終的な解決にはおよばなかつたとみえます。それでも、のちにゴータマ・ブッダがさとりを得たときに、まつさきに説いて聞かせようと考えたのがこの二人であるという点からすると、当時の最高の宗教者であったことはまちがいないでしょう。

つづいてゴータマ・ブッダは苦行を始めます。これまでに例のないほどのはげしい苦行で、死の一歩手前まで近づいたようです。食をまったく断ち、呼吸を完全に止めてしまえば、もはや生きているのか死んでいるのかわからなくなります。このようにして肉体の束縛から精神を自由にさせ、それによつて解脱の境地を得ようとする苦行も、ついにゴータマ・ブッダの目的にかなうものではありませんでした。かれはまる六年もつづけた苦行を捨てる決心をします。そして村の娘スジャーターのささげるミルク粥を食べて体力の回復をはかります。それを見た五人の苦行者仲間は、ゴー

タマ・ブッダが墮落したとして離れていきました。

ここで気をつけなくてはならないのは、ゴータマ・ブッダが排したのは瞑想至上主義であり、苦行至上主義であるという点です。かれは瞑想や苦行の意義をまったく否定しているわけではありません。実際にかれの教説において、瞑想はきわめて重要な意味をもつていますし、かれが定めた教団の規則は苦行者のそれよりもきびしいものがあつたといわれます。ある弟子たちはその緩和をはかつたといわれるほどです。

(三) 成道と説法

生気をとりもどしたゴータマ・ブッダはアツサツタ樹（ゴータマ・ブッダがさとり、すなわち菩提を得たことから、のちに菩提樹と呼ばれます）の下におもむき、結跏趺坐して、「さとりを得るまでけつしてこの場所を去らない」と断固たる決心をします。このように励むゴータマ・ブッダの前に悪魔が現われ、煽情的あるいは暴力的手段によって修行を妨げようとしたが、ついに果たせなかつたといわれます。この場面はきわめてドラマチックな物語です。

マテイックに脚色されており、ゴータマ・ブッダの不動の姿勢を力強く表わしていますが、ひるがえって見てみると、あることを象徴しているように思えます。つまり、悪魔の誘惑は、一・このようなさとりを求める修行をやめること、二・還俗し、家長として祭祀を行なつて多くの功德を積むこと、の二点にあり、けつときよくバラモン教徒たちが行なうべき道を勧めているのです。したがつて、悪魔は宗教・哲学界における旧勢力の象徴であり、さまざま攻撃は、新勢力に対する旧勢力からの抗議ないし抵抗であったといえます。もちろんゴータマ・ブッダは旧勢力を超えて進んだわけです。一方、降魔に関してはゴータマ・ブッダの心理的な葛藤の象徴であるといふ説もあります。たえまのない修行の隙間にしのびよる邪まなこころの誘惑とその克服とを描いたのだとするのです。これも傾聴に値すると思われます。

さて、悪魔をしりぞけたゴータマ・ブッダは、菩提樹下の金剛座で瞑想に入りつつ、ついにさとりを得たといわれます。三十五歳のときでした。「わたしの解脱

あることもつけ加えておきます。

さて、ゴータマ・ブッダはまずアーラーラ・カーラマとウッダカ・ラーマ・ブッタに教えを説こうとしますが、兩人ともすでにこの世の人ではありませんでした。そこで、五人の苦行者仲間に説こうとします。かれらはゴータマ・ブッダを見放して、バーラーナシームガダーヤ（鹿野苑）にいました。この地はイシパタナ（仙人が集まるところ）と呼ばれ、多くの修行者が集まっていたのです。ゴータマ・ブッダが訪ねたとき、かれらは最初ゴータマ・ブッダを歓迎しないと申しあわせていたにもかかわらず、その姿にうたれ、けつきよくは教えを聞くことになります。

これがいわゆる「初転法輪」で、ここから仏教教団の歴史が始まることになります。かれらはゴータマ・ブッダの教えを理解しました。ゴータマ・ブッダと同じレヴェルでさとつたとされる点はみのがせません。このことは、さとりというものをはるか遠くにもつていい、ゴータマ・ブッダをふつうの人間には及びもつかない存在にしてしまつた、のちの仏教教団、および

それをそのまま信じこんでいるわたしたち自身に一つの反省をうながすものでしょう。さとりはもつと身近に考えられていたのです。

その後、豪商の息子ヤサを出家させ、ウルヴエーラーのバラモンであつたカツサバ三兄弟を神通力で降伏させるなどして、ゴータマ・ブッダの教えは爆発的に広がつていきました。さまざまな階級の人々が仏教という集団のなかでひとつになつていったのです。ラージャガハでは、ビンビサーラ王が進んで信者となり、仏教最初の精舎、竹林精舎を寄進します。ついでサリップッタ、モッガラーナ、マハーカツサバという卓越した人物を得て、仏教教団はますます発展していきます。サリップッタはゴータマ・ブッダの後継者と目された人でしたし、マハーカツサバはゴータマ・ブッダが亡くなつたとき、かれの到着を待つために葬儀がおられたほどの重要な人物でした。

そのほか、生国であるカピラヴァットトゥをおとずれて息子ラーフラをはじめシャーキヤ族の人々を多く出家させたり、豪商アナタピンディカが祇園精舎を寄

進するなどのできごとがあり、晩年にはデーヴアダッタの造反、生国カピラヴァットトゥの滅亡など、悲しむべき事件があつたと伝えられていますが、成道から入滅までの四十五年間の記録は編年史的には残つています。教えを説きながら遊行するという、文字どおりの伝道の旅だったのでしょうか。

(四) 入滅

八十歳になつたゴータマ・ブッダは、ラージャガハを發つて最後の旅に出ます。すでに死を覚悟していたのでしょうか、「わたしはわたしが知り得たすべてを、あなたたちに教えた。物惜しみして拳のなかに隠しているようなことはない」「自己とダンマを頼りとし（自帰依、法帰依）、他を頼りとすることなかれ」など、遺言めいたことばが發せられています。

旅の途中で訪ねた鍛冶工チユンダの供養したきの料理（豚肉料理という説もあります）を食べたゴータマ・ブッダははげしい腹痛におそれます。その苦痛にたえながらクシナーラーに着いたときには疲れはててい

ました。「アーナンダよ、わたしは疲れた。横になりたい」。ゴータマ・ブッダはサーラ樹のしげる林に入り、二本のサーラ樹（沙羅双樹）のあいだに、右脇を下に、頭を北に、足と足とを重ねて横になりました。アーナンダは涙を流して泣いています。

「アーナンダよ、泣くでない。わたしはあなたに説いたではないか。およそ生じて存在するものが滅しないということがあろうか、と。あなたは長いあいだよく仕えてくれた。これからも努力しなさい。きっと汚れのない身になるだろう」。

臨終が近づいてもなおゴータマ・ブッダは教えを説き、スバッタという修行者を仏教に入門させています。このとき、「わたしは二十九歳で善を求めて出家した。出家してから五十余年が経つた」と、みずからつねに

らない。わたしが説いた教えと、わたしが定めた戒めとが、わたしの死後、あなたたちの師となるのだ。そして最期のことばは、「[自己]を」形成する力（サンカラ）は無常である。怠ることなくして、修行を完成しなさい」でした。

死後七日経つて、ゴータマ・ブッダの遺体は荼毘にふされ、八つに分けられてそれぞれの地で祀られるようになりました。一八九八年、カピラヴァットトゥに近いピプラーワーでペッペが発見した舍利壺にはその旨を記した刻銘があり、この伝承が事実であることが確認されました。

二 ゴータマ・ブッダの思想

(一) ブッダとは何か

日本の仏教を見てみると、わたしたちが親しみを覚え、なおかつ崇拜の対象としているのは、はるかに遠いインドのゴータマ・ブッダではなく、聖徳太子にはじまって、空海、最澄、法然、親鸞、一遍、道元、日蓮などの、わたしたちが宗祖と呼んでいる方々です。はやられない』と。しかし、そのように思つてはな

仏教の原点としてのゴータマ・ブッダの思想をかりかえることは、わたしたちにとってときには必要なことなのではないでしょうか。

インドにおける最初期の仏教を日本の仏教と比較すると、これらがどうして同じ「仏教」という名で呼ばれているのか、と思うほどの違いがあります。たとえば、少なくとも最初期の仏教では、ゴータマ・ブッダは宗教的な絶対者として、崇拜の対象になつてはいません。つまり、ブッダとは、仏壇に入れて祀つて拝んだりするものではなかつたのです。ゴータマ・ブッダは、わたしたちと同じ人間であり、それが精神的かつスピリチュアルな成長のプロセスの究極として、ブッダになつたのです。したがつて、けつして不遜でもなんでもなく、かれと同じ人間であるわたしたちもブッダになる可能性を秘めているといえます。これは重要なポイントです。ゴータマ・ブッダの弟子たちはゴータマ・ブッダを拝んでいたのではなく、みずからもかれと同じブッダになるべく修行していたのです。

ゴータマ・ブッダは「さとり」を得て、「ブッダ」にしあわせたのです。この「さとり」は、何を意味するか、何を実現するか、何を達成するか、など具体的な内容ではありません。むしろ、この「さとり」は、心の内面で起きた変化や成長、悟りや洞察などの精神的・心的変化を指す概念です。つまり、この「さとり」は、心の内面で起きた変化や成長、悟りや洞察などの精神的・心的変化を指す概念です。

まず、仏教でいう眠つてゐる状態ですが、わたしたちは、自分を中心として自分のまわりを世界が回つてゐる、ないしは自己と世界とが対立して存在しているかのような認識のあり方を、日常的にあたりまえのように何の疑いもなく採用しています。それにもなつて、意識する・しないを問わず、永遠に変わらない「わたし」が他者とたがいに何のつながりもなく、バラバラに孤立して存在しているかのような見方ができてしまします。そのような見方は当然唯一正しい見方であると考えられています。その結果、永遠に変わらずけつして死なないはずの「わたし」に過剰に執着するところから、現実にはやはり死んでしまう「わたし」

なつたといわれますが、この「さとり」「ブッダ」ということばに、ゴータマ・ブッダおよび仏教の思想の本質が表わされています。パーリ語やサンスクリット語のような古代インドの言語では、両者とも「目覚める」という意味の動詞の語根、ブドウから派生したことばで、「さとり」とは「目覚め」という意味の名詞であり、「ブッダ」とは「目覚めた」という意味の過去分詞および形容詞です。「ブッダ」はまた「目覚めた人」をも指します。したがつて、「さとり」「ブッダ」という日本語だけでは意味がはつきりつかめませんが、古代インドのことばから考へると、「さとり」を得るということと「ブッダ」になるということとはまったく同じ意味であり、「目覚める」という意味が両者の根本にあるということが自然に理解できます。目覚めるということが重要なのです。

目覚めるというくらいですから、眠つてゐる状態から目が覚めるのです。わたしたちは毎朝かなづら目が覚めていますので、そういう意味では、わたしたちは毎朝ブッダになつてゐるといえます。しかし、仏教的

とのギャップが生じ、わたしたちの生存、生・老・病・死に関わるもろもろの苦しみがもたらされるのです。このわたしが死ぬはずがない、何かのまちがいではないか、などと考え、現実との折り合いがうまくいかず、そのうえ、死んだらどうなるのだろうなどの解決できない新たな不安も生じてきます。このような結果をもたらす人生にいつたいたい意味はあるのか、と虚無的にもなります。これが仏教でいう眠つてゐる状態、およびそれにともなつて生じる苦しみです。わたしたちにはなじみの状態だと思います。

ところが、永遠に変わらない「わたし」が他者とたがいに何のつながりもなく、バラバラに孤立して存在しているかのような自己中心的な見方が破られ、そのような見方がけつして絶対的なものではなく、仮に想定されたにすぎないものとして自覚されれば、それだけで永遠に存在するものなどなく、他者とたがいにつながりあい融合して存在している新しい世界が開けてくる可能性があります。あらゆるもののがひとつの全体としてつながりあい、密接に関係しあつており、わた

したちはそのなかの一部でありながら、しかもそれがそのまま全体の生命を生きている、というような実感をきわめて鮮明に受けとることができます。それがさとり体験です。「さとり」ではなく、あえてさとり体験といわせていただきます。バラバラにしか見えなかつたものが、つながりのあるものとして見えてくる、というのがさとり体験です。その内容はたしかに体験しないとわかりませんが、どのような体験であるのかはあいまいなものではなく、明確ではつきりした説明が可能なのです。さとりとは、けつして単なるひらめきのようなものではありません。また、何も考えない、何も感じない、無機的な境地でもありません。

自己と世界が融合して存在しており、そのような自己を含む世界がそれぞれ意味をもち緊密なつながりをもつものとして見えてくるのです。いまここでこうしていることが、宇宙が始まったときからすでにあるかのように、きわめて強い必然性をもつて実感されます。仏教では、このことを「縁起」と呼びならわしてきました。わたしたちの日常語となつている「縁起がよい、

縁起が悪い」という言い方には、そのような、わたしらちはあらゆる出来事と何らかの関係、つながりをもつてゐるという漠然とした感じが表現されています。茶柱がたつとよいことが起こる、靈柩車を見て親指を隠さないと悪いことが起こる、などなど、多くの事例をあげることができます。本来、科学的で合理的な因果関係が成立しない現象のあいだにある種のつながりを認め、整合性、論理性といったものでは割り切れない何らかのつながりを感じとる心性といつてもよいでしょう。

縁起ということについて考えてみましょう。縁起は縁によつてものごとが起ころる、原因によつて結果がおこる、と読めるところから、ものごとには原因があるものだ、この原因にはこの結果がある、というような、一種の因果論として解釈されることが多いようです。しかし、縁起を因果論で解釈すると、ゴータマ・ブッダの思想を見誤ると思ひます。なぜなら、因果論とは、もともとバラバラであるものが、因果という条件で関係しあつてゐるという見方だからです。それは、さき

ほど述べた眠っている状態での見方の延長なのです。

一方、目覚めている状態での見方とは、すべてのものがつながりあつてゐる、それはもともとひとつの全体としてつながつてゐるのだという実感を強くもつことです。微妙ですが、決定的に違つています。因果論では、わたしたちのバラバラの見方は基本的に何も変わっていません。バラバラの見方からつながりの見方へと転換させるところに修行の意味があります。因果論では修行は必要ありません。

同じようによく誤解されますが、ゴータマ・ブッダの思想では、そのようなさとり体験をすること自体が重要なではありません。さとり体験は一時的なものなので、それを安定した状態へとつなげいかなければなりません。すなわち、体験によつて、それまでの自己中心的な認識のあり方やバラバラの見方がもたらした「わたし」への過剰な執着に気づき、それを超越して、いわば全体中心的な認識のあり方やつながりの見方へと安定的に成長していくことが最も重視されるところです。なお、自己中心的な認識のあり方やバラ

バラの見方はまつたくなくなるわけではありません。ただ、それに振りまわされたり、煩わされることはないになります。

実際には、さとり体験によつて全知全能の人間が産みだされるわけでもなく、それによつてわたしたちのかかる問題のすべてが解決されるわけでもありません。さとり体験によつて、かえつて「わたし」への執着が強くなる場合もあります。体験の強烈さや修行の副産物としてある種の能力が身につくことから、「わたし」が他者よりも優れた特別の存在になつたかのような錯覚をもつ場合があるのです。それは、さとり体験をすることだけが目的になるときにおちいりやすい落とし穴といえます。そうではなく、得られた体験とその後のバランスのとれた洞察から、永遠に変わらずけつして死がないと思つて過剰に執着していた「わたし」そのものが仮に想定されたにすぎないということがわかると、それまでの自己中心的な認識のあり方やバラバラの見方がもたらした「わたし」への過剰な執着は消え、そこに起因するわたしたちの生存、生・老・

病・死に関わるもろもろの苦しみがなくなります。現実にはこのように簡単にはいきませんが、究極の境地を設定するトスレバ、これが仏教でいう目覚めている状態、およびそれとともに苦しみの消滅です。わたしたちはほとんどなじみのない状態だと思います。

このような仏教的な文脈で、眠っている状態から目覚めている状態にいたることが、さとりを得てブッダになるということなのです。それは同時に、みずからが作りだした悩みや苦しみからの解放でもあります。

通常ではバラバラの見方しかできないわたしたちが、修行により、つながりの見方へと見方を転換することによって、「わたし」への過剰な執着を消滅させ、そこに起因していたわたしたちの生老病死に関わるもろもろの苦しみを消滅させることができるというのが、ゴータマ・ブッダの思想の核心だと思います。

また、ブッダとは特定の個人を指す固有名詞ではありません。普通名詞として、あるいは形容詞として、だれにでも使われるものです。「目覚めた人」であれば、だれでもブッダなのです。ゴータマ・ブッダだけがブ

(三) 苦しみは消滅するという真実、(四) 苦しみを消滅させる方法があるという真実、です。ゴータマ・ブッダは、自分と同じような苦しみで悩んでいる人々に對して教えを説こうとしました。自分の苦しみは單なる個人的な苦しみではなく、こころをもつ人間であればだれもがもつ苦しみであると考えたからです。

生き死にの問題についていえば、生命あるものにとって本来自然なプロセスである生死が生と死に分裂し、生は「わたし」を維持する好ましいもの、死は「わたし」を破壊する好ましくないものとなります。永遠に変わらない「わたし」は「わたし」の死を受け入れれず、拒否することで現実とのギャップが生じ、生きることへの執着が増すとともに、死にたいする恐れや不安が大きくなります。さらに、死後については確定的なことは何もいえないで、死んだら何もないと考えれば、そこからいま生きていることに意味が失われてきます。虚無につつまれながら、それでも生きなければなりません。これこそが、出家の前のゴータマ・ブッダも悩んだ「苦しみ」なのです。どんな苦しみより

ツダなのではなく、かれは多くのブッダのうちの一人です。ですから、さきほども述べたように、わたしたちも目覚めればブッダになれるのです。仏教はブッダの教えですが、宗教的絶対者であるブッダに帰依し礼拝するという教えではなく、すべての人人がブッダになるための教えであるといえます。

(二) 苦しみからの解放

ゴータマ・ブッダの考え方の基本は、生き死ににつわる営みのなかで、現実に自分自身が何かを苦しみと感じているかどうかから始まります。客観的な苦しみなどなく、あるのは、わたしたちが何かを苦しみと感じているという主観的な事実です。したがって、苦しみの自覚のない人にとっては、ゴータマ・ブッダの教えはほとんど意味をもちません。病気の自覚のない人が医者にかからないようなものです。

ゴータマ・ブッダが最初に説いたといわれているのは「四つの真実」です。それは、(一) 苦しみがあるという真実、(二) 苦しみには原因があるという真実、

も根源的なこの最大の苦しみは、時代や地域によつて形成の仕方に違いはありますが、わたしたちが自分自身で、固定的で実体的な「わたし」をつくりあげ、自己と自己以外のものを分け隔て、それぞれをバラバラに孤立させてしまつところに起因するのです。

他者と何のつながりもなくそれだけで存在している永遠に変わらない「わたし」を無意識のうちに想定し、他者と絶対的に切り離されバラバラに孤立した「わたし」を中心とする世界を基盤にすえて営まれる生活が、わたしたちの生き死にの問題について、最も根源的な苦しみをひき起こすのです。

ゴータマ・ブッダがさとりを得たときに考察したといわれているのは、十二因縁です。十二因縁は「四つの真実」をより詳しく説明したものであり、どのようにして眠っている状態および苦しみが生じているのか、どのようにして眠っている状態および苦しみが滅するのか、そして、どのようにして目覚めた状態になるのか、ということを図式的に示したものといえます。以下に、原始仏教經典の『ウダーナ』から、どのように

して苦しみが生じているのか、を説いている部分を意訳してみます。

何によって起るかを自覚することはできないが、もろもろの自己形成力がはたらいて、固定的で実体的な「わたし」が永遠にそれだけで存在するかのように思いこむ自己が形成される。それとともに、わたしたちが日常的かつ常識的に疑いもなく身についている、自己を中心として自己と世界が対立しているかのような認識の形態が成立して、自己と自己以外のものを分け隔て、たがいに何のつながりもなくバラバラに孤立して存在しているかのように思いこむ自己が、みずから基準によって世界を価値づけて受け取る。その価値づけは自己中心的な欲望として無意識の習性となり、正体を現わさないまま、わたしたちを闇の底から突き動かす、得体のしれない衝動となっている。そのような自己のあり方や認識の形態、自己と世界の価値づけはけつして絶対的なものではなく、

いわばまったくの仮構なのであるが、そのことに気づかずに、これこそが自己と世界の唯一のあり方であるとして、みずからの固定的で実体的な「わたし」に過剰に執着するところから、わたしたちの生存、生・老・病・死に関わるもろもろの苦しみがもたらされる。すなわち、永遠につづくべき「わたし」が、なぜか老い、病み、死んでしまう、その矛盾にどうしようもない恐れや不安をいだくのである。わたしたちの苦しみの根本的な原因はここにある。

ゴータマ・ブッダ自身もみずからの苦しみを自覚し、それを何とか解決したいと修行を始めました。そして、その根本的な原因は、わたしたちが、何に縁つてかはわからないが、それだけで永遠に変わらずまた他者と何のつながりもなく孤立して存在しているような「わたし」というものを作りあげ、そこに過剰に執着して自己中心的な見方や行動に偏ってしまうことにあると見極めたのです。

さて、わたしたちは、ふだんにげなくことばを使いますが、ことばには、あるものとそれ以外のものとを明確に分離するはたらきがあります。たとえば、「ここに時計があります」といったその瞬間に、時計と時計以外のものがまったく分離されてしまします。また同時に、時計が他と何のつながりもなく、それだけで永遠に存在しているかのような錯覚をひきおこすのも、ことばの大きなはたらきです。

そのことに気づかない今まで、わたしたちは「わたし」ということばを日常的に使い、生まれたときからずっと「わたし」と「わたし」以外のものを分けて生きています。その結果として、「わたし」が他者と何のつながりもなく孤立し、「わたし」だけで永遠に存在しているかのような錯覚をもつてしまします。そして、錯覚され、また狭く限定されかつ絶対化された自我を基盤にして、他者の関係をはかり、社会の一員として生活していくとします。

原始仏教經典では明確には説かれていませんが、苦しみの根本的な原因としての「わたし」を作りあげる

一つの大きな要素に、ことばがあげられます。このことばによる仮想の世界を後退させ、あるいは実質的に機能させないための最も直接的な方法として、ゴータマ・ブッダが採用したのが、瞑想なし禪定です。瞑想を実践すると、ことばを使うことによって無意識のうちに固着化した、「わたし」への過剰な執着をほぐすことができるからです。ちなみに、瞑想以外の方法、すなわち題目、真言、念佛にも同じようなねらいや効果があります。

瞑想などの修行の究極において感得した全宇宙、全存在との一体感により、わたしたちに悩みや苦しみをもたらしていた世界との分離感、バラバラの感覚は癒され、そこに起因する、死にたいする恐れや不安はなります。人生が苦しみであり、そこには出口がないようになります。人生が苦しみであり、そこには出口がないように見えたのは、引けば開くドアを一生懸命に押していたようなものだとわかります。わたしたちがかかえている苦しみは、このようにして消滅するのです。